

Steel Landscape

鉄の点景



遥かなるノスタルジー

ブリキの玩具

テレビなどでも取上げられているので、ブリキの玩具の収集がひそかなブームになっていることを知る人も多かろう。ブリキの玩具は1960年代の終わり頃からにわかに姿を消してしまった。それなのに何故、今、ブリキの玩具なのだろうか。ブリキの玩具が本来の目的でつくられることは絶えてない。が、専らコレクターを対象に最近、複製品の製造も始まっているというのである。

まだ現役ではあるけれど

大体、ブリキという言葉自体、たいそう古めかしい。確かにかつて、ブリキはセルロイドと並んで玩具の材料の双璧だった時代があった。セルロイドとは童謡「青い目の人形」に「アメリカ生まれのセルロイド」と歌われているあれだが、昨今ではめったに見かけなくなった。これに比べればブリキは現役である。量が少ないので忘れされかかっているが、缶詰やびんの王冠にどっこい生きている。輸出だってされているのだ。

ちょっと身元調査をしてみると、ブリキは「JIS G 3303 ぶりき及びぶりき原板」としてJISに記載されている。低炭素鋼の原板に錫を電気めっきを施したものと溶融メッキを施したものがある。柔らかく加工性に富んだ材料であり、ある程度の耐食性も備えた材料であることがわかるが、ブリキのいちばん大

きな特長は、白くなめらかな表面とそこに印刷インクがよく乗ることである。ブリキはおそらく多彩なカラー印刷を可能にした最初の金属材料であった。ブリキの玩具が昔栄えた最大の理由がここにあった。

リサイクルのはしりでもあった

ブリキの玩具が初めて脚光を浴びたのは、1851年、ロンドンで開かれた水晶宮で有名な第1回万国博覧会である。ドイツ、ニュルンベルグの玩具製造業者が出展したもので、この頃ブリキ玩具の製造業者はニュルンベルグに2軒しかなかったのが、わずか10年後には240社にも増えていたという話が伝わっている。缶詰はナポレオンが軍用糧秣の保存用のアイデアを募集したのに応えて1804年にフランスのアルベールという人が考案したのが最初とされる。1824年イギリスのデュランドがブリ



キ製缶詰を考案して特許を取り、瞬く間に普及した。どうも初期のブリキ玩具はこの缶詰の廃品利用からスタートしたらしい。だとすれば、ブリキ玩具はリサイクルのはしりだったといえよう。

第二次大戦の敗戦で食糧難に見舞われた日本はアメリカから大量の食糧援助を受け、その見返りとして玩具の輸出を要求された。当時は物資が枯渇しており、日本の玩具業者は材料の調達に悩んだ挙句、清掃事業協同組合というものをつくり、進駐米軍の廃品回収を申し出、廃品の缶詰を集めて玩具をつくったという。“歴史は繰り返す”である。

玩具の王座に君臨した

18世紀頃からヨーロッパでは盛んに機械仕掛けで動く玩具がつくられるようになる。しかしこの時代のものは、単品の手づくりであり、木製や陶製のボディーに機械部分を仕込んだため寸法も大きくて家庭で親しまれる玩具の域に達していなかった。これを金属という当時の新素材で小型化し量産すれば売れるだろうということから、19世紀に入ると金属玩具が続々つくられるようになる。先にも述べた耐食性がある、ハンダが効き、カラフルな印刷ができて毒性もないといったブリキの特性がこの傾向に結びついた。さらにフランスのロシニョールがハンダ付けに代わって爪で接合する「爪止め」を考案して特許を取り、ブリキ玩具の加工は革命的に進化、以来、ブリキ玩具といえば爪が付き物となる。それやこれやの要因が複合して、ブリキ玩具は金属玩具の主流となり、しばらくの間は玩具全体の主流ともなったのである。第二次大戦の前に物心ついた世代の人なら覚えがあろうが、ブリキの玩具は百貨店か大きな玩具屋にしかない高級品だった。



しかし、20世紀半ば頃からのイノベーションの波でプラスチックという画期的な新素材が登場、ブリキは急速に玩具材料の王座を追われてしまう。デパートの売り場で子供達にうっとり見つめられたあの過去の輝きは永遠に失われてしまったかのようにであった。

古きよき昔の香り

ところが、それから3、40年、ブリキ玩具は好事家の興味の対象として復活した。ブリキ玩具のコレクションがブームになったのは、①多色刷りされていて他の収集物には見られない鮮やかな色彩が楽しめる、②多くは動く玩具である、③鋳造品やプラスチック成型品のような精密さはないが、どこか稚拙なその造形がユーモラスであったり、一見冷たい金属製品でありながら人間的な温かみを感じさせる、などさまざまな理由が挙げられている。

しかし、最大の理由は、それが遠い昔に失われてしまった何かへのノスタルジーを強くそその存在であるからなのだろう。

■参考文献

ブリキのおもちゃ大博物館（中島 登、講談社）
おもちゃの歴史（フランソワ・テメル、松村理恵訳、文庫ケセジュ）

〔取材協力・写真提供：財団法人日本玩具資料館〕